



日野原重明記念

# 「新老人の会」東京 会報

Keep on going!

Vol.2/No.4

2020.11

## あの日あの時

日野原重明記念「新老人の会」東京顧問 早乙女勝元

猛暑とコロナ禍に悩まされた戦後七十五年も、残り少なくなってきた。

今年は、私にとっては忘れられぬ年で、「東京空襲を記録する会」発足から五十年になる。当時の私は三十代そこそこだったわけだ。きっかけはある日のこと、居住地の葛飾区で、歴史家の家永三郎先生を招いての「教科書の話し」と題する講演会があったことだ。先生は、高校生向けの歴史の教科書を執筆されていたが、掲載の写真が「戦争を伝えるには暗すぎる」という文部省の意向に反発されて、教科書検定訴訟に踏みきったことで知られている。

「これからの教科書から、戦争の記事や写真は少なくなっていくでしょう」という一語で講演は終了したが、その後の懇親会の席上で、私は思いきって手を挙げた。

「先生、原爆の写真や記事は、もともととあってほしいですが、もう一つ、教科書にぜひにと思うものがあります」

「ほう、それは何ですか」

「無差別爆撃の東京大空襲です。十万人もの生命(いのち)が失われ

たのに、惨禍の継承は極めて不十分です」

「同感です。これは今のうちに、なんとかしませんと・・・」

先生の声に、悲痛感があったのが、私の胸にささった。

その夜、私はひそかに「東京空襲を記録する会」を立ち上げて、革新都政下の美濃部亮吉都知事に都民参加の大資料集編纂助成の陳情を思いついた。やるなら今だと思った。

ほぼ一週間後に、都知事への要望書をまとめて、東京教育大学の家永研究室を訪れた。同行者は評論家の松浦総三氏だった。家永先生にはさぞご迷惑なことだったろうと今にして思うが、先生は私の要望書をご親切にチェックしてくださって、私たちの運動にもいろいろとアドバイスをしてくださった。

都知事室で美濃部都知事との初対面が実現したのは、一九七〇年八月五日で、知事の回答は一〇〇%の快諾だった。その後のマスコミの反響といったら、想像をはるかに超えていた。「東京大空襲・戦災誌」(全五巻)は、完成までに三年余もかかっ

たが、内外の評価は高く菊池寛賞ほかをいただいている。

その延長線上で、民立民営による「東京大空襲・戦災資料センター」が、江東区北砂にお目見えし、私は初代館長で十七年間も振り回されたが、現在は、一橋大学名誉教授の吉田裕先生とチェンジしている。

コロナ禍のいわゆる三密回避のおかげで、修学旅行生徒の足が遠のいたのは痛手だが、コロナなんかには負けてたまるかである。

何事もすべては一人から始まる。一人がいなければ結果はゼロである。いつのまにか私もいい年になつたが、尊敬する日野原重明先生を思えば、まだまだ先がある。



東京大空襲・戦災資料センター  
(今年6月に全館リニューアルオープンしました)

所在地 〒136-0073 東京都江東区北砂1丁目5-4  
TEL 03-5857-5631  
HP <https://tokyo-sensai.net>



早乙女勝元 先生  
1932年東京生まれ。作家であり、平和活動家。底辺の青春をテーマにした作品が次々と映画化される。1970年に「東京空襲を記録する会」を結成。2002年3月、民立民営の東京大空襲・戦災資料センター開設。館長に就任。2019年6月退任。

# 「日野原先生の精神(こころ)を継ぐ」2

## 父・善輔先生の影響



医療法人社団パリアン 理事長 川越 厚  
クリニック川越 院長

「まぼろし」という言葉は、日野原重明先生が講演などでよく話された、三つのVの中の最初のV (Vision) のことです。この言葉は先生の精神(こころ)を理解しようとする場合、非常に大きな意味を持っています。このキーワードを視座に据えて先生のことを語りたいのですが、そのためには重明先生の父君、日野原善輔先生のことにも触れざるをえません。

一八七七年(明治十年)生まれの善輔先生は関西学院の神学部を卒業し、その後米国留学、神戸中央メソジスト教会(現在の神戸栄光教会)の牧師などを経た後、一九三〇年(昭和五年)から十二年間、広島女学院(赴任当時の名称、広島女学校)の第三代院長を務められました。六十五歳になられた



日野原善輔先生

一九四二年に先生は院長職を辞し、玉川平安教会の招聘を受け牧師として牧

会活動を再開され、八十一歳でお亡くなりになるまで、生涯をキリスト教の宣教に捧げられました。重明先生が家庭で、教会で、父・善輔先生の話を聞きながら大きな影響を受けたことは、想像に難くありません。私は、重明先生が亡くなる四か月前に『命の響き』という善輔先生の遺稿集を重明先生から手渡しいただきました。この貴重な本のおかげで善輔先生のお人なりがよくわかると同時に、親子とはいえず、お二人の人生哲学、生き方、歩まれた道があまりにもよく似ていることに驚きました。

遺稿集の序文には、「牧師の善輔先生が一日三十軒以上! 信徒のお宅を訪問した」ということが記されています。俄かには信じがたい数ですが、善輔先生はその情熱的な行動パターンは百歳を超えてもなお診療を続け、様々な形で医のあり方、人生を語り続けていらした重明先生の姿と重なります。また「Keep on going! (前に歩み続けよ!)」という言葉は重明先生の生涯を貫いた

モットーの一つですが、この前向きな生き方も善輔先生から受け継いだものであることがよくわかります。

二〇〇〇年九月、八十八歳の重明先生は「新老人の会」運動を立ち上げました。ご承知のように、この「新老人の会」には「愛し愛されること、創めること、耐えること」という三つのモットーがあります。先生はこのモットーを、精神科医フランクの言葉を参考にして作られたとのことですが、非常に深い内容の味わい深い言葉です。中でも「創めること」という第二のモットーには、「重明先生の「Keep on going (前に歩み続けよ!)」という人生哲学が色濃く反映しています。

「新老人の会」の会員の方は、高齢になってもなお「新しいことを始める」「前向きな生き方を続ける」というわけですから、大変厳しい生き方を背負っていることとなります。しかしこのような生き方こそ、「新老人」の新老人たる所以だと私は考えています。

川越 厚 (かわごえ こう)  
1973年東京大学医学部卒業。茨城県立中央病院産婦人科医長、東京大学講師、白十字診療所在宅ホスピス部長を経て、1994年より6年間、賛育会病院院長を務め、22床の緩和ケア病棟を立ち上げた。2000年6月クリニックを開業すると同時に、主にがん患者の在宅ケアを支援するグループ「パリアン」を設立。訪問看護、居宅介護支援、ボランティア等のサービスを提供している。著書多数、近著に『ひとり、家で穏やかに死ぬ方法』、2014年NHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」出演。

### サークル報告

## 『初めての俳句』の会

半年間メール句会が続きましたが、十月は広い会場で句会を開く予定です。季語を頼りに十七首で自分の思いを言い留める事は難しいですが、蘭先生のご指導の下、皆で愉しんでいます。(寛子)

七月 兼題「夏帽子」「割」

夏帽子旅の約束反故にされ コッコ

西瓜売りタクラマカンのバスの旅 夢子

七夕や遠からねども逢えぬ母 明子

遠吠えのごときいかつら地を突いて 寛子

立ち昇る雲に挨拶夏帽子 緑

夏帽を目深に美人度二割増し 蘭

トムソーヤになりきれた日の麦藁帽 七厘

カンカン帽粹に傾け講師来る 玲子

崖下へもつれて梅雨の番ひ蝶 郁子

夏よ来い力溢れる剋太の書 まり

どれ買おかあれこれ試す夏帽子 まえの

九月 兼題「良夜」「活」

長き夜や曾孫の動画妻と見る コッコ

マスクして婚活の合言葉珠沙華 夢子

葡萄といふ緑の宝珠甲州路 明子

高原の花蕎麦密に入は疎に 緑

手すきぎに庭の水引抜けもして 寛子

鳥渡る島に生活の細き階 蘭

終活を他人事にして良夜哉 七厘

パンパスグラスの穂いや白き良夜かな 郁子

露草挿すたかっぱといふ漆桶 まり

絵具には表しきれぬ秋夕焼 まえの

飛鳥蘭選



# 戦後七十五年の今、思うこと

終戦七十五年の節目に思うこと

金子信三（九十四歳）

一〇〇歳の天寿を全うした長兄の家訓としての言葉に、「人の一生では、戦争、飢餓、疫病、災害、に遭遇するものとして対応を準備せよ」とありました。

私の九十四年の生涯で最大のポイントは太平洋戦争です。十九歳近くで学力や体力をつけ青春を謳歌すべきとき、学業は中止され、文系学生は戦場に、理系学生は兵器生産工場に送られました。その工場も米軍のB29の爆撃にあい逃げまわり、食料不足で倒れるなど、戦場や工場で多くの友人、知人を失いました。全く悲惨なものでした。

地震は天災ですが戦争は人災です。いかにして戦争の再発を防ぎ、平和国家を維持していくかが、残された命に与えられた宿題です。日野原先生に教えていただいた病気の予防や自己管理に努め、人と対話できる時間を保っています。

『いのち』あるすべてのものに愛をこめて

黒瀬真一郎（七十九歳）

先生のご尊父・善輔先生は、一九三〇年から十二年間、広島女学院校長・院長を務め、発展の礎を築かれました。重明先生は京都大学在学中、結核を患い広島

で一年間療養されたこともあり、被爆地広島への特別な思いと愛着を抱かれました。同校に五十年間勤務した私は、このような縁で長年薫陶をいただきました。

私も先生の崇高な使命感に賛同し、お手伝いしてきたことの一つを紹介します。被爆六十年（二〇〇五年）にあたり、次代に生きる子どもたちへ平和の種まきとして、祈りを込めた大イベント「日野原重明・小澤征爾・吉永小百合 世界へ送る平和のメッセージ」を開催しました。この企画に賛同する者は「すべてボランティアで」を合言葉に、約二〇〇人の市民や学生が協力。先生の創作詩と吉永小百合の原爆詩の朗読。主治医・日野原先生のこの趣旨に賛同された小澤征爾は、フォーレの「レクイエム」を八十人編成のオーケストラと四二〇人の市民合唱団で演奏。一万二千人の聴衆が集い、世界へヒロシマの心を高らかに発信しました。この感動は終生忘れることはありません。

一〇〇歳を過ぎても凛として、おれることなく研ぎ澄まされた感性で、子どもから大人へ「生きとし生けるものすべてのいのちが大切にされ、戦争のない平和な世界の創造」を説き続けてきた先生の祈りを伝え続けたいと思います。

## 大東亜戦争と私

押川昭（八十七歳）

私は、来年五月に米寿を迎える。思い返せば、旧満州からの引き上げ者として幾多の苦難を乗り越え、何とか現在の安定した家族との生活を享受している幸せ者でもある。しかし、大東亜戦争指導者への恨みは常に心底に残っているが、それを乗り越え生き続けているとも言えよう。

戦争体験は、いつの間にか忘却の彼方へ去ってしまったのかも知れない。つまり、私なりに惨めな敗戦によるどん底生活から抜け出し、かつ米国シカゴ市で男の子二人を育てられた幸運にも恵まれたのであるから、勝者から敗者への贈り物をいただいたことになる。大東亜戦争は、私の支配者ではなく、すでに忘却の彼方にある遺物と化した。しかしながら、人間の争いは、利害の衝突は決して消え去らない。「欲望」は残念ながら人類の悪の遺産なのかも知れない。

長崎に住んでいた私にとっては、これからも世界平和を心から願い、自分の日常生活体験を通して戦争へ進む要因を減らす努力を微力ながらも続けたい。

戦後七十五年の今 思うこと

小泉靖子（八十四歳）

戦争に負けてから七十五年経ちました。その間、他国を攻撃していない、攻

撃されてもいないということは素晴らしいことです。この平和が未永く続きますよう心から願っています。

戦争を忘れた民族には、後に必ず同じ運命が訪れるといわれています。今、七十歳以下の人々は忘れるどころか戦争そのものを知りません。戦争を知っている私たち世代には、戦争を伝えていく義務があります。

今や、私は、伝えるためだけに生かされているような気がしています。

戦争を知ってもらいたいと毎年、朗読会「あの日、あの頃」を開いていますが、私たちが伝えられる最後の世代になってしまいました。これから先も伝えていくためにはどうしたらよいか、いつもそればかり考えています。

『いのち』を守って平和を

岡村日出子（八十一歳）

終戦の年、私は小学一年生。田舎の学校で神社の社に逃げ込んだ。終戦の二、三年後、映画「広島原爆」を学校の講堂で観て強烈なショックを受けた。無惨なる人々の姿を初めて知り言葉が出なかった。

終戦七十五年目、新聞やテレビや本などで多くの現実を知った。沖縄の戦い、学童疎開船の沈没、東京その他の都市大空襲、広島、長崎の原爆、外地の兵士の死体の山、今も後遺症で苦しむ人々：にもかかわらず政治は人々の思うようには

動かず進まない。七十五年もかけて学んだ大切な「平和」が、私を含めて他人事のように過ぎていってしまう。

日野原先生は「いのちほど大切なものはない」とご自分の人生を重ねて、「いのちの授業」を始められた。私も共感する。小学生という時期から教えたい。敗戦の深い意味や、国を問わず他人の「いのち」も、自分の「いのち」と同じように大切に。自分も確かな平和を築ける一人であると。

## SSA 便り

九月二十九日「Zoom in SSA」の活動がNHK「ひるまほほ」と（関東甲信越）で紹介されました。「週一回のZoomで想いを共有することで気持ちが見えなくなり、老々介護が前向きになった」「コロナ禍で外出の機会がなく取り残された気分になっていたが、新しいことを教えてもらい世界が広がって来た」など笑顔で話す会員の様子に「皆さんが楽しく取り組む姿に元気を貰った」と視聴者から多くの感想が寄せられたそうです。



※NHKより写真使用承諾取得済み

## with コロナに生きるとき アートにチャレンジしませんか？

「大人のアートクラフト」 吉島 洋子



コロナ禍によりサークル活動の「大人のアートクラフト」も再開が難しくなりました。でも、このような時だからこそアートをと思

い、アナログ人間の私でも助けがあれば何か発信できるのではとの思いに、長く私の仕事を手伝ってくれた人と妹が賛同してくれ、アートクラフトを動画にしてYouTube (M.C.Y.アトリエ) から発信し、みなさんに見て頂けるようになりました。

私は、美術学生時代に児童美術に興味をもち、卒業後は自身の絵画制作・発表と両立できる範囲で、大人の油絵指導と子どもたちの工作、絵画、デザインなどの指導をアトリエで続けてきました。

そんなとき、父が通っていたNPOのデイサービスの依頼を受け、創作的なアートクラフトでお手伝いすることになりました。絵は上手下手に拘りがちですが、アートクラフトは、そんな先入観も吹き飛び、個性が溢れ、ご自身も驚くような作品ができます。私も、子どもたちとは違った発想に度々驚かされました。

そのような経験から、ともすると尻込みしがちなシニアにこそアートが必要と痛感。介護の現場にも一人ひとりの個性が発揮できるアートクラフトをと『身近な素材でArtクラフト』

(朝日出版社)を妹の協力を得て自費出版しました。が、その直後に大怪我をし、本の宣伝活動もままならないとき、昔からの知人で「新老人の会」でエッセイサークルを主宰されていた井上悦子さんのご紹介で当会に入会しました。そこで、前向きな方々と知り合い、私自身のためにもなると思い「大人のアートクラフト」の活動を始めました。日野原先生の提唱なされたモットーの一つ「創めること」に勇気づけられました。

意欲的な参加者も増え、頭をフル回転させ、制作過程を苦しんだり楽しんだり、他の人には表現できない自分だけの作品が多く生まれています。これからもYouTubeの動画は続けるつもりです。

みなさんも動画を見て楽しんで頂き、アートにチャレンジすると何か閃いたり、思わぬ自己発見があるかも知れません。また、お互いに制作した作品を見せ合えるような方法を考えてみたいと思っています。



M.C.Y.アトリエ

検索 🔍

### 「新老人の会」東京

2020年 会員数364人(296件)  
2019年 会員数489人(397件)

### 会員募集中!

年会費

個人・家族会員 5,000円  
賛助会員 (一口) 10,000円

### 編集後記

コロナ禍で活動ができない中、せめて会報を通して会員同士の繋がりを感じていただければと思います。今年は終戦75年の節目にあたります。当会の5項目の目標の一つに「20世紀の負の遺産である戦争を通じて学んだ体験と、(中略) 次の世代に伝え世界平和の実現に寄与する」を掲げておりますので、巻頭言は早乙女勝元先生に、特集として5人の方々はその思いを寄稿していただきました。川越厚先生の「日野原先生の精神(こころ)を継ぐ」は連載しますので楽しみに。ご意見、ご要望がございましたらお寄せください。 Eメール: t.shinrojin@gmail.com